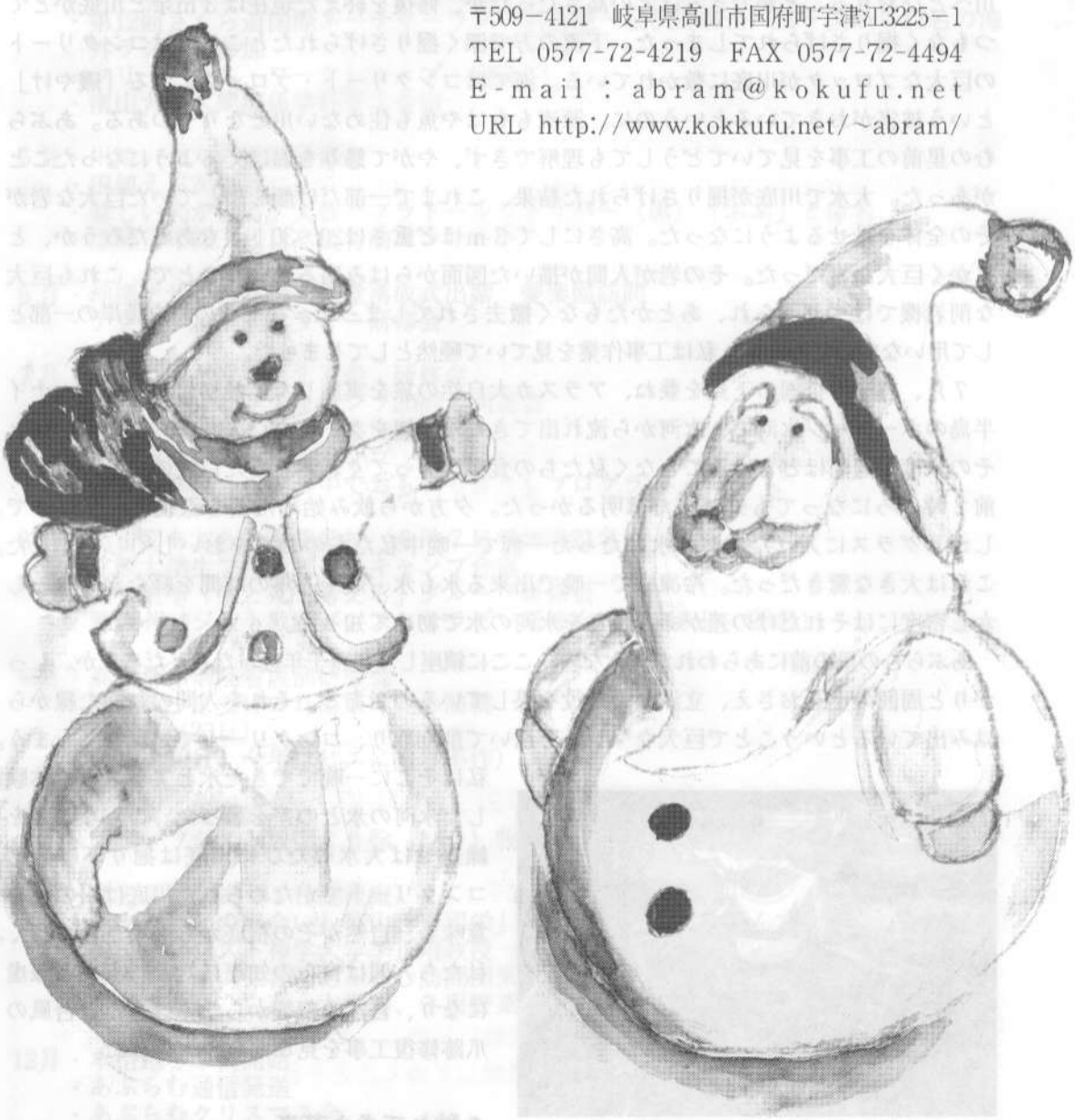
あぶらむ通信

第27号　2005年12月　　あぶらむの会発行
〒509−4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225−1
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@kokufu.net
URL http://www.kokkufu.net/~abram/



アラスカから来たサンタクロース

飛騨便り

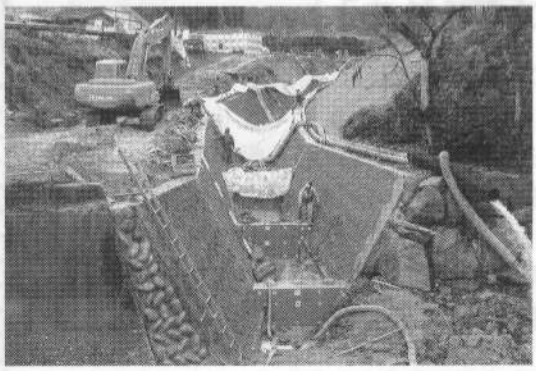
あぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。2005年、今年もアッという間の一年でした。大切な人との別れもいくつかありました。でもこうして一年の終わりに私たちのこの一年の出来事をお届けすることができること嬉しく思います。写真と共にお伝えします。

●台風の爪跡から

昨年の10月20日、この地方を襲った台風23号はあぶらむの里前を流れる宇津江川にも大きな被害をもたらした。その修復作業は現在も続いている。私たちがこの地にきた時は道から川へとびおりることができるほどの高さだったが、修復を終えた現在は３ｍ余と川底がとてつもなく掘りさげられてしまった。下流の方で深く掘りさげられたところではコンクリートの巨大なブロックが川底に敷かれている。海ではコンクリート・ブロックによる「磯やけ」という被害がおきているというのに。源流ももはや魚も住めない川となりつつある。あぶらむの里前の工事を見ていてどうしても理解できず、やがて怒りをおぼえるようになったことがあった。大水で川底が掘りさげられた結果、これまで一部だけ顔を出していた巨大な岩がその全体を見せるようになった。高さにして３ｍほど重さは20～30トンもあるだろうか、とにかく巨大な岩だった。その岩が人間が描いた図面からはみ出るということで、これも巨大な削岩機でけずり取られ、あとかたもなく撤去されてしまった。なぜその岩を護岸の一部として用いないのだろうか、私は工事作業を見ていて唖然としてしまった。

７月、将来の企画の下見を兼ね、アラスカ大自然の旅を実施した。最初に訪ねたキーナイ半島のポーテージ氷河で、氷河から流れ出てきた氷の塊をクーラーに入れもち歩いた。何とその氷は１週間ほどとけることなく私たちの食糧を守ってくれた。また白夜のアラスカは午前２時ごろになっても外は未だ薄明るかった。夕方から飲み始めた酒も深夜１～２時まで。しかしグラスに入れた氷河の氷はたった一個で一晩中私たちのお酒をおいしくしてくれた。これは大きな驚きだった。冷凍庫で一晩で出来る氷も氷、幾千万年の時間を経た氷も氷。しかし密度にはそれだけの差があることを氷河の氷で初めて知った。

あぶらむの里の前にあらわれた巨大な岩。ここに鎮座して幾百千年経ったことだろうか。しっかりと周囲の土をおさえ、立派な護岸役を果しているのである。それを人間のひいた線からはみ出ているということで巨大なマシンを用いて削り取り、コンクリートで処理してしまう。私はそこに一晩でできた氷とアラスカで体験した氷河の氷との差を思った。こんなことを繰返せば大水のたびに川底は掘り下げられ、コンクリートでかためられた川底は川の死を意味し、自然がその根底から破壊されて行く。私たち人間は自らの知恵に対してもっと謙虚になり、自然の叡智から学ぶべきだと台風の爪跡修復工事を見ながら一人思った。



台風被害の修復、三方コンクリートで固められた宇津江川

●訪ねてきた若者

夏のある日、あぶらむに見慣れぬ車が止まっ

た。中から乳のみ子をかかえた若い夫婦と小さな子ども２人がでてきた。「久しぶりですけれど俺おぼえています？」しばらくじーっと思い出していた私、「もしかしてあの時の…」、そうあの時の彼だった。

あれは10数年ほど前だった。突然の電話であぶらむを見学したいとのこと、急なことなのでことわろうと思ったらもう着いてしまった。２人とも当時としては未だ珍しく髪は金髪でまゆ毛はなく、一見して荒れた状態の中学生だった。連れてきたのが養護施設の職員、強引に泊まらせてほしいといって翌朝起きてみたらその２人の少年を置き去りにしていっていた。腹が立って仕方がなかったが２人の少年には罪はないと思い、その後２週間ほど生活を共にした。大人への不信感は強く、私たちに心を開くことなどはなかった。そんなある日、収穫を終えた田でハサのかたづけ作業を一緒にした。かたづけの手順を説明し、２人にまかせた。始めは私のいった通りにしていたが、その後２人で相談しながらあれこれとやり方をかえていた。結局最後は私の指示したやり方の方が効率的と思ったのか、その方法で黙々とやっていた。そんな彼等を見て私は嬉しかった。その日の夕食後の会話。「今日はやり方を３度ほど変えたなぁ」、「見てたのかぁ」、「ああ、よく見てたよ」。このことがささやかな信頼感の出発点となったのか、彼らは大人や教師に対しての不満をぶつけた。

「大人や先生たちはすぐに決めつけてしまう。それが腹立たしくてつい粗暴になってしまう。きのうはやりすぎたと反省し、今日は少しは真面目になろうと思って学校へ行くのに、先生たちはぼくらを見る目を変えようとしない。決めつけられてしまうと、その分だけかえって乱暴になってしまうんだ。きのうのボクと今日のボクとは違うんだ！」

「きのうの僕と今日の僕はちがう」、相手の中に日々生まれる小さな変化を追うことに疲れ、決め付けという一度押した烙印でしか他者を見ようとしない私達大人。若者の中に日々に生まれる小さな変化を受け止めてやることの大切さを教えてくれた少年だった。

その彼が10年余ぶりに家族を連れて訪ねてくれた。「中学校も満足に出ていない自分が生きれる世界なんて限られている。俺は現在、トビ職で家族を支えている。こんど独立するんだ！もうじき小さいけれど家も建つんだ」。堂々と誇らしげだった。嬉しかった、心から嬉しかった。

●朗読

あぶらむの宿の一隅に図書コーナーがある。私はそこに「あなたがお読みになって感動された本をご寄贈下さい」と書いた小さな看板をかかげている。本を読んでの感動を自分一人のものとせず、他者と共有していきたいからである。

数年前、尼崎にお住まいの畑野榮一先生から大石邦子著「人は生きるために生まれてきたのだから」が贈られてきた。私はその本の一節を、研修をお引き受けして15年になる高山日赤病院の看護師さんの研修会で朗読することにしている、自戒をこめて。

世界11ヶ国から集まった第12回さくら道ランナー達

少し長くなりますが皆様にも読んでもらいたいので引用させてもらうこととします。

その1　生きる力をくれた看護婦さん

あのとき、あの人に出会っていなかったなら、私の人生はどうなっていただろう。いまもそう思っている、ある看護婦さんとの出会いを紹介します。

桜の季節でした。

会津には、鶴ヶ城というお城があります。桜の名所で、ソメイヨシノが三千本ほどもあるといわれます。お城が花に埋もれます。

お花見の時季には、ぼんぼりが灯って、夜桜見物の人たちでにぎわいます。

当時は、私の入院していた病院のところまで、ずっと桜並木がつづいていました。

枕の下を、のどかな夜桜見物の人たちが行き交います。それは、生きた社会のざわめきでした。生きている音でした。病院というところは、窓一つ隔てて、内と外では、天と地ほどもの違いがあります。

私は、もう自分では歩くことができないだろうということを察していました。

「私のために、隣の土地も売られたと聞く。妹は、せっかく入った大学を辞めてしまった。みんな私のために苦労している。私なんか、生きていたって生きていなくたって、世の中少しも変わりなく動いていく」

そんな、落ちこぼれ感に苛まれながら寝ている枕の下は、夜桜見物の人たちののどかな足音です。

そんな夜でした。いろいろ考えているうちに、一気に頭に血が上ったようになって、なにがなんだかわからなくなってしまったのです。

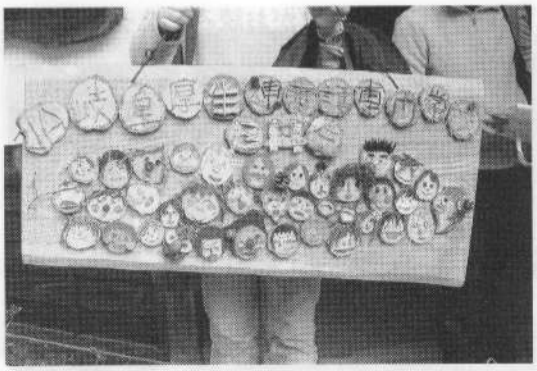
もうだれに、どう思われたっていいのです、生きたって死んだってかまわないのです。

私は、あらん限りの大声で泣き叫び、手当たり次第に物を投げ捨てて、真夜中、一大大暴れをしました。深夜のことでしたから、その物音は病棟中に響いたと思います。

看護婦さんがすっ飛んできました。

「どうしたの、くーちゃん」

看護婦さんは、そう言ったきり、呆然と立ちつくしていました。その看護婦さんめがけても、物を投げつけました。



ＪＡ看護学校新入生研修会。木片を用いての自分の顔、それを集めてクラス旗。三年間皆で励まし支え合おう！

看護婦さんはびっくりしていたようでしたけれども、私から投げつけられる物を避けるようにして、そばに寄ってきました。

いくら狂ったようになっていても、自分のしていることが、いいことだとは思っていません。たぶん、叱られるだろうとも思っていました。でも、もうとまらないのです。

そして、投げつける物がなくなると、看護婦さんの着ていたカーディガンを、引っ張ったり叩いたりして泣き叫んでいたのですが、看護婦さんはなにも言わないのです。なんに

も言わずに、ただ、じっと私を見つめているだけなのです。

どうして怒らないんだ、と思いました。なにしろ命懸けの大暴れですから、もう引っ込みがつきません。早く怒ってもらわないと、収拾がつかなくなっていたのです。

でも、看護婦さんはなにも言わない。ただ、じっと私を見つめているだけでした。看護婦さんの目がとても哀しそうに見えたのを、いまも覚えています。

そのうちに、私は精も根も尽き果てて、声も涙も出なくなってしまいました。そんな私を見届けるように、看護婦さんは、おもむろに床に膝をつくと、私の頭を抱き寄せるようにして涙をふいてくれました。

いよいよ怒られるな、と思いました。

そのときです。看護婦さんは、こう言ったのです。

「ちょっとだけ、桜を見てこようか」

それは、まったく思いがけない言葉でした。

私はいまだから、あの夜の一大ヒステリーの引き金になったものが、あののどかな夜桜見物の人たちの足音だったのではなかったか、ということを考えられるのであって、そのときは、そんなことをいちいち考えながら大暴れするほどの、心の余裕はありませんでした。

でも、看護婦さんは、本人の私でさえ気づかない、心の向こうの向こうを見通すように、「ちょっとだけ、桜を見てこようか」と言うと、私に引っ張られてヨレヨレになったカーディガンを脱いで私に着せ、帯なんかありませんから、タオルケットを背中から胸に回し結んで、私を背負って、真夜中の細い階段を降りていってくれたのです。

私は、そのときの看護婦さんの背中のあたたかさを、いまも忘れていません。だれが、なにを言ったわけでもないのです。背中の私を揺すりあげながら、真夜中の階段を降りていってくれた看護婦さんの背中のあたたかさが、私に思わせたのです。

「ああ、どうしてあんな馬鹿なことをしてしまったんだろう。あんなことしたって、どうしようもないんだ。耐える以外ないんだ、我慢する以外ないんだ。わるかった。看護婦さんに謝ろう」

だれが、なにを言ったのでもない。背中の私を揺すりあげながら、真夜中の階段を降りていってくれた看護婦さんの背中のあたたかさが、私にそう思わせたのです。

もしも、あのとき、

「もうこんなことをするのなら、強制退院です。あなた一人ぐらい、この病院にいてもらわなくたって、この病院は少しも困りはしないんだから。もうこんなことするのなら、この病院を出てもらうしかありません」

こんなふうに言われていたとしたら、私の人生は、ずいぶん違ったものになっていただろうと思います。でも看護婦さんは、そうは言わなかった。そう言われてもしかたのないような状況にありながら、なおそうは言わなかった。そうは言わずに、母親

今夏も訪ねてくれました。立教小学校あぶらむキャンプ。

が子どもを抱き寄せるように、私を抱き寄せて涙をふき、母親が子どもを背負うように、私を背負って夜の階段を降りていってくれたのです。

私は、この看護婦さんの背中を胸に感じながら、思いました。

「ああこの看護婦さんは、青春時代を病み、もう二度と治ることのない障害を負って生きていかなければならない私の、この心のやり場のなさを、私のこの悲しみを、せつなさを、空しさを、この看護婦さんはともに背負ってくれたんだ。この病院には、私の心をわかってくれる人が在ったんだ」

そう思えることが、そののち生きていくうえで、どれほど大きな力になったかわかりません。

あのときの、看護婦さんの対応いかんでは、私の人生はずいぶん違ったものになっていただろうと思います。

自分が、一人の人間として、ほんとうに大事にされた。そう実感するとき、人はきっと変わってゆきます。自分が一人の人間として、本当に大事に扱われた。そう実感するなら、たとえどんなダメな人間であったとしても、少しずつ、少しずつではあったとしても、きっとその人に向かって、心を開いていく。それが「いのち」の力だと、私は信じて生きてゆきたいと思っています。

その2　人を思いやる心

最後に、もう一度、お願いしたいことがあります。

人間は、心と体を切り離して生きることはできません。それができるなら、どんなに楽だろうと思います。

肉体の一部が病むということは、おのずと心にもなんらかの影を落とします。それが自然なのだと、もし医療にたずさわる方々に考えていただけるとしたなら、患者はどれほど救われるだろうと思います。

だからこそ、医療にたずさわる方、特に看護婦さんには、病気そのものにのみ目を向けるのではなく、病気をもって悩み苦しむ人間そのものの、援助者であってほしいと、心から思います。

病院というところは、人間の裸や、人が苦しむ姿や、人間の死が、日常のこととして、見慣れた光景として、繰り広げられているところです。でも、どんなに見慣れた光景であったとしても、その環境に、慣れてしまわないでいただきたいと、切に思います。

今年の稲作、ヒエにやられ不作でした。

どんな仕事においても、慣れるからこそ、ベテランとして、その道のエキスパートとして、すばらしい働きができるのも事実です。

しかし、慣れるということには、一つの大きな「落とし穴」があります。慣れるあまりに、ともすると、人間としての柔軟な感性やこまやかな心遣いを鈍らせ、わるくすると、麻痺させてしまう場合があるということです。

人が、人の前で裸になったり、苦しんだり、死んでしまうということは、一般の人にとっては、非日常も非日常の、非常事態です。医療にたずさわる方々には、それらの姿が、どんなに見慣れたものであったとしても、そうした人生の哀しみに対する感覚だけは、鈍らせないでいただきたいと思うのです。

苦しければ苦しいほど、人のやさしさが身に沁みます。

米がダメなら大根で。あぶらむ女性軍のような太く立派なものばかり

私は、いつも講演の最後は、私を背負って、夜桜を見せてくれた看護婦さんの話で締めくくります。今日は医療にたずさわっておられる方々の集まりでしたが、学校でも、企業でも、各市町村の講演会に招かれたときでも、いつもそうです。

この看護婦さんの姿こそ、いまの時代、なによりも求められながら、得られないでいるもののような気がするからです。

親と子、先生と生徒、上司と部下、同僚、友だち、妻と夫、嫁と姑ーどんな関係にあっても、この看護婦さんが見せてくれたような人間としての思いやりは、きっと、お互いの絆を堅固なものにし、信頼を深める大きな力になるだろうと思います。

人間関係の基本は、信頼です。信頼にまさる力はありません。私は、そう思っています。

いままで、ほんとうに多くの方々に支えられ、励まされて、生きてくることができました。今度は、その友情を、思いやりを、私もまた、だれかにお返ししながら生きてゆくことができたならと思っています。ありがとうございました。

私は、この「生きる力」と「人をおもいやる心」を精一杯のおもいをもって看護師さん達に朗読します。それは自分に対しても語りきかせる作業でもあります。そして、このあぶらむの里がそのような場であり、そのような場になって行くことを願い祈ります。

この秋も、6ヶ月間生活を共にした若者がここから旅立って行きました。至らぬことの多かった私です。この夏10数年振りに訪ねてくれた若者のように、いつかまた何かの機会にここを訪ねてくれることを祈ります。

そんなこんなの繰り返しでこの一年も過ぎようとしています。近い将来皆様にご無理なことをお願いするようになるかもしれません。荒れ乱れた時代の中で、若者の心を育てる仕事を目指したいと思います。その時は最後のお願いをするかもしれません。その時はどうぞ皆様のお力をお貸し下さい。

それでは、どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

2005年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　博

補導委託ということ

辻　村　徳　治（神戸家庭裁判所）

昨年から、あぶらむの里には、神戸家庭裁判所からお願いして、非行少年を預かっていただいている。これは身柄付補導委託という少年法上の制度である。補導委託という社会貢献の意味を、あぶらむの会会員の方々にご理解いただきたいと考えて筆を執った。

1　補導委託について

補導委託制度は、試験観察という中間決定の一つで、民間の方々に非行少年を数か月お世話いただいて、生活訓練や交友関係の調整などをお願いするという身柄付補導委託と、老人ホーム等の施設に社会奉仕活動の目的で通所するというタイプの2種類がある。大郷先生にお願いしている身柄付補導委託は、そのまま家庭にいたのでは実現できないことを、「親代わり」として生活を共にしてご指導いただくというものである。

家庭裁判所が非行少年を一般家庭にお願いするという制度は、家庭に問題がある少年を生活から変えさせようとするもので、その原因を除去するという意味で妥当なものである。従って補導委託制度は、家庭裁判所の伝統として受け継がれている。

2　あぶらむの里を知るまで

数年前から、家庭裁判所が発足して50年を経たことを契機に、それまで築いてきた補導委託制度を一層充実するため、時代の要請にマッチした補導委託先を開発しようという動きがあった。旧知の宮嶋眞牧師から「大郷先生の所だったら、預かってくれるのではないか」と教えられて、飛騨の地を訪問した。

大郷先生との再会は、20年以上前に立教大学キリスト教教育研究所が主催していたラボラトリー方式の人間関係訓練でお世話になって以来のことである。「あぶらむの里」を始められたことを私は全く知らなかった。

訪問してみて、ここでなら、少年を預かってもらえそうだと実感した。古民家に対するこだわりや「再生」させようという考えが、少年を大事にしてもらえそうな気がした。また、奥さんの明るさと包容力が、「寂しい」少年にはピッタリなのではないかと感じた。家庭裁判所からの依頼はなかったらしいが、以前から30歳までの青少年を100人以上預かってこられたと聞いて、これは大丈夫だと確信した。その訪問からしばらく時間がかかったが、最初のケースとして黙々君（仮名）をお願いすることになった。

3　黙々君を連れてあぶらむの里へ

黙々君は16歳の夏を少年鑑別所で過ごした。２度目だった。前回は保護観察で家へ帰れた。今回の事件は、前回の事件の前に起こしていたひったくり事件が発覚したもので、事件の内容としても悪質なものである。また、保護観察の成績も良好とは言えない状態で、怠惰で仕事も長続きせずに、夕方に起きて朝まで遊ぶという生活をこの年の３月くらいから続けており、５月にはバイクの部品を盗むという事件も起こしていた。

黙々君を家へ帰すには地元の友達関係（ことに先輩との関係）が心配であった。保護者である

母親も、これ以上悪いことをされると大変だという不安をもっていた。少年院へやるには、事件発生から時間が経ち過ぎていた。またそれ故に、彼の反省は進んでいなかったので、試験観察（身柄付補導委託）によって、様子を見ることになった。

神戸からあぶらむの里まで、母親と同行したが、5時間余りの間、黙々君は母親に、補導委託になった不満を繰り返して述べており「俺は絶対変わらないからな」とまで言ったようだった。

4　黙々君は黙々と

自分の事件を警察には言わないという「だんまり」を決め込む黙々君ではあるが、もともと寡黙な人であった。しかし、息子さんの大郷博輔さんと同じ屋根で生活するなかで、黙々君は心を開いていったようで、夜には彼が紅茶を入れて、博輔さんと話をするまでになった。また、木工所では黙々とパズルを作るという作業をこなした。彼は、糸鋸作業開始から3個目で完成品を作り出したという、まさしく天才的な才能を発揮した。この集中力と才能を見いだしてもらったことが補導委託の大きな成果であった。教育は才能を引き出すことだとは良く言われるが、そのような理想的な教育があぶらむの里で実現したのである。

半年近く仕事中心の落ち着いた生活を送ったことは、黙々君の大きな自信となった。最後の審判では、母親へのプレゼントとして、複雑な形の孔雀の木工品を完成させたものを渡した。その後は保護観察が解けて、地元で元気にやっているらしい。

5　補導委託先として優れているところ

黙々君の次にお願いした少年も、その長所を引き出してもらった。単なる偶然ではない。長所を引き出していただけるのが、第一の優れた点である。非行少年は一般に、自尊感情が低く、この回復が非行からの立ち直りに重要だが、現実にはなかなか難しい。長所を発見して、伸ばしてもらえることが、非行からの回復につながっている。

少年が逃げ出さずに落ち着くのは、奥さんを始めとしたスタッフの明るさと、家族同様に受け入れてもらえる暖かさがあるからだ。また、適当な距離を置いて待ってくれて、本人が近づいてくる動きに合わせてくれることが、難しい年頃の子に対するときに大事なことだが、それが実現されている。

紙幅の関係でこれ以上述べるのは控えるが、簡単に言うと、個人の暖かい家庭に預けるという利点と、仕事が多様という施設の利点がうまく統合されていることが、なによりも優れているところである。

6　終わりに

少年を見事に「再生」してくれる、すばらしい補導委託先が得られた。大切に使わせてもらいたいと考えている。今後とも、非行少年への理解を深めていただいて、彼らの更生に力を貸していただきたい。

また、このような社会貢献の偉大さを会員方々にも理解していただいて、今後ともこの活動にご支援をいただきたい。

「あぶらむの会」のさらなるご発展を心からお祈りしている。

い（医）い（癒）旅を

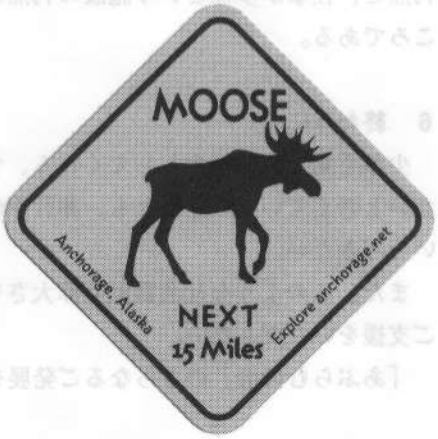
笠　井　正　志（小児科医）

2005年7月あぶらむアラスカツアーに参加させていただきました。小児科医であるが、年をとれば大人も子供も同じである、とツアードクターの役割も与えていただきました。しかし、メンバーのみなさんの「アダルトチルドレン」振りは、すさまじく、飛行機内でワインからビールから飲むわ飲むわ・・・。アルコールは利尿作用が強く、体の脱水症状の原因になり、血管がつまりやすく、エコノミークラス症候群（急性肺血栓塞栓症）の誘引となる。とても心配しましたが、気が弱い自分は、みなさんのパワーに圧倒され、ツアードクターの任務の一つである予防に関しては、自己管理に任せることにし、目をつぶることにしました。未病を防ぐことの困難さを痛感させられました。

旅は人を変える？

ある種の旅には何やら人間を変える力がある。と思ったのは、医学部4年生の時、あぶらむの会の「笠井正志の人生を狂わせる会*」からネパールツアーに行かせてもらった時です。あの時の少年少女達の劇的な変貌ぶりをみたからです。最初は自意識過剰な普通によくいる少年少女でしたが、日に日に活発になり、ネパールのガンドルンでしか出来得ない、素晴らしい芸術を創造しました。ご興味あるお方は、あぶらむで写真集でもごらんになってください。感動すること間違いなしです。

「癒し」という言葉に出会ったのもこのネパール旅行でした。恥ずかしながら医学部では、「癒し」を学ぶことはありませんでした。個人的にも、「癒し」とは、なんとなく宗教じみていて、怪しげな一部の変わった人が行っているものという印象がありました。旅行の間中、大郷先生が、Andrew Weil（アンドリューワイル）氏の「癒す心、治る力（原題：Spontaneous Healing）」を、熱心に（ツアーメンバーのことはそっちのけで）読まれておられました。その時、本の内容について疑問を持たれた際、自分に質問されても何も答えられず、「医学部で何を学んでいるのか・・・」と呆れられたことを思い出しました。ネパールから帰国後すぐに購入して、夢中になって読んだ記憶があります。ワイル博士は、現代医学を学びながらその「抗（anti-）」医学（抗生物質、抗がん剤など）に疑問を持ち、伝統医学やシャーマニズムなども実践。ひとが本来持っている自然治癒力を高めることで病気を治し、病気への対抗力を高める代替医学などの第一人者になった人です。「癒す心、治る力」が出版されたのは1995年です。その頃はまだ下火だった「癒し」ですが、今はブームの時期はすぎ、自己治癒力を高める様々な方法が工夫され、存在して当然になりつつあります。一部には商業主義丸出しのものや全く根拠のないものまでありますが、セルフメディケーション「予防医学・代替医療を心掛け、なるべく薬に頼らない」医療の流れは、日本人の本来の姿に戻る、大変好ましいものと思われます。



＊笠井正志の人生を狂わせる会とは：東京大学の西平

先生が会長で大郷先生が副会長の非営利団体。私信ですいませんが、西平先生、どうやら会の思惑通りの人生になりそうです。

旅の医学的効果

ストレスを感じると上昇すると言われているコルチゾールというホルモンの血液中濃度が、旅行中に減少することを証明した研究があります。旅すること、特に気の合った仲間と和気藹々と旅することは、心身に非常によい作用があるようです。旅行中はニュースを読まない、聞かない、話さないという「ニュース断食」も「癒す心、治る力」にも書いてありましたが、これも慌しい日常を忘れ、癒す効果があるのでしょう。また、あぶらむの旅行は常に出会いがあります。ツアー仲間との出会いも素晴らしいものですが、あぶらむツアーならではと思われるのは、旅行した先の現地方々（現地をよく知る方）との出会いが濃厚なことではないでしょうか。出会いが濃密なだけ、人の体も心も変える強い力のあるのでしょう。

あぶらむツアーへのご提案

日本では衛生環境の向上が著しく、A型肝炎は比較的珍しい病気になりましたが、東南アジアなどの発展途上国はA型肝炎汚染地域です。特にネパールでは、海外からの旅行者の診療を実施している著名な医師が、日本人で破傷風とA型肝炎の予防注射をしているものは5%に満たないが、欧米からの観光客ではこれらの予防注射をしていない者は5%に満たない。日本人はもっと破傷風とA型肝炎の予防注射をしてくるべきである。という意味の論文を国際旅行医学会雑誌に発表しています。ネパール旅行参加者にはA型肝炎ワクチンと破傷風ワクチンの接種を勧奨いたします。また大郷先生を始めとする剛毅な方々にご忠告です。「ばいきんなんてアルコール消毒するから大丈夫」と言われますが、科学的根拠は全くないでたらめです。アルコールが入って菌が胃の中で殺菌されるわけではありません。またエコノミークラス症候群の誘引になりますので、飲みすぎには十分ご注意くださいませ。

欧米にはトラベルクリニックという、旅行者や国外在住者のための医療サービスを施すクリニックや専門医師が沢山います。渡航前にワクチン接種、下痢症に対する予防的処方、持病をお持ちの方が旅する先の病院紹介、紹介状の作成など旅行に関する医学的サポートを全面的に引き受ける専門家です。わが国でも年間1600万人が海外旅行に出かけています。国民がより安全で質の高い旅行を求め、障害や持病を抱えるかたも海外旅行にどんどん出掛ける時代となりました。今後わが国でも旅の医学面での安全をサービスする医師が増えてくるべきだと思います。自分も先日旅行医学会に入会しました。いつか旅行医学専門医となり、「おとなからこどもまでのネパールツアー」を「お年寄りから乳児まで＆健康者から障害者までのネパールツアー」にグレードアップする、そのお手伝いができればと願っています。

旅には時間とお金がかかります。せっかくの旅が台無しにならないように、予防接種を含めた十分な準備と旅行中の健康管理に留意して、思う存分楽しみ、癒されてください。

あぶらむとアジア

1．ガヴィス奨学基金報告

その1

2003年にあぶらむへ移管されたガヴィス奨学金基金ですが、この1年半余あぶらむの実力不足で独自の活動を展開するには至らず、既存の団体支援というかたちで行ってきた。

その第一は「コーディリエラ・グリーン奨学金」の里親サポートです。

この奨学金を主催運営しているのは、私が立教大学時代一緒にフィリピン・キャンプに参加し、現在はフィリピン人のご主人と結婚してバギオという町に生活している反町真理子さんです。ご主人の出身地カリンガ地方はフィリピンのルソン島でも経済的に最も恵まれていない地域です。この地域出身の子で、将来地域の発展に寄与すべく、現在カリンガ州立大学に学んでいる青年達の奨学金として支援しています。

2004年1名、2005年は新たに3名を里親として支援することとなった。4名の奨学生を紹介します。

●メルチョー・カガリン（21才男・専攻農業）「卒業後地域の発展のためどのような貢献ができるか」という問いに彼は次のように答えている。

「パシル（地方名）の現状について私が考えるのは、クリニックにおける医薬品の不足についてです。ぼくが地域の発展のためにできることといえば、自分の大きな薬局クリニックをつくり、充分な医薬品をそろえます。そして、それを人々に安い価格で販売したいと思います。そうすれば薬を買い求めるために、わざわざタブックに行く必要もなくなるわけです。（注・タブックはカリンガ州の首都で、彼らの地域から車で3時間ほどかかるところ）

●リサ・クリス・バガイ（17才女・会計学専攻）

「パシルの現状を生んでいるのは貧困問題だ。貧困は人々に学がなく、教育をうけた人がごくわずかであることが原因だ。人々は自分たちのコミュニティーをどうやって発展させていったらいいのかわからない。もし私が大学を卒業したら、コミュニティの人々に教育の大切さ、すべての学生はしっかり勉強しなければならないことを伝えなくてはならない。なぜなら、教育こそがよりよいくらしへの「橋」となりうるのだから。」

●ヴェロン・バシクル（19才女・経営学専攻）

「もし私が卒業したら、私はコミュニティの発展を助けていきます。パシル地方の現状は危機的状況にあり、よりよい未来のためにパシルの発展に努めていきます。」

●ディノ・ダウィゴイ（21才男・技術専門短期コース専攻）

「パシルの状況はあまりにも危機的であり、また貧しいと思います。多くの人が貧困状態にあります。」

ご紹介したように2005年度は上記の4名の学生の里親として支援することとなりました。私は送付されてきた書類を見て心痛んだのは家族の年収欄の数字及び家族が抱える問題でした。4名の学生の親の職業は全て農業で、家族の年収が0（ゼロ）、最も年収のある子で500ペソ（1万円）でした。家族が抱える大きな問題として、「米など必要物資の不足、経済難、私達の家族は貧困の真っ只中にあります」と記されていました。

国情の違いといってしまえばそれまでです。しかし、同じ時代に生を共有している者として、やはり「人生の旅人同士」実状を知ったからにはそれなりに助け合わなければならないのではないでしょうか。今後ともささやかな支援活動を続けて行きたく思っている。

その２　「ミンダナオ子ども図書館」

里親支援

数年前、あぶらむの宿を訪ねられた松居友さんが貧困の中にも必死に生きるフィリピン・ミンダナオ島の子供達の支援のため活動を開始された。（朝日新聞2005年11月24日「人」欄）里子一人、年間24千円、ガヴィス奨学金からささやかな支援を送ることとした。

2．韓国監理教（メソジスト派教会）との人的交流

2002年９月、韓国ではそれまで禁止されていた日本の歌舞音曲が解禁されることとなった。それを機会に「東アジアにおける宗教と文化交流」をテーマにしたシンポジウムがソウルで開催された。その時知り合ったメソジスト神学大学教授・李正培先生がその後はるばるあぶらむを訪ねてきて下さった。私たちの生活を見て何か感じることがあったのか、国に帰ってからあぶらむのことを宣伝されたらしく、その後メソジスト教団の牧師さんたちの訪問団が多くなった。

その中でも農村伝道神学院院長・車興道牧師は年に一度は10数名の視察団をひきつれてここを訪ねて下さるようになった。

そんなこれまでの交流の中で新しい提案がなされてきた。韓日間のさらなる相互理解のため、また本人の日本語研修のため、そして人手不足に悩むあぶらむへの応援のため、一人の牧師家族を一年間あぶらむへ派遣したいということであった。お互い協議の結果、あぶらむとして受けいれることとした。

10月29日、韓国メソジスト教団牧師・徐澄竣（ソウ・ヒョンジュン）さんがやってきた。ビザの関係で家族一緒という訳にはいかなかったが、まず一人で来て年末に一度帰国し、春になって家族一緒にという段取りで考えている。

何かとぎくしゃくしている韓国と日本、だからこそ我々民間レベルではしっかりとそして確かな相互理解を築き上げて行かなければと思う。あぶらむがそれを可能とする一つの拠点になって行けばと願い祈っている。

2006年主な行事予定

- **あぶらむ雪祭**
  2月10日～13日
- **夏期あぶらむ自然学校**
  8月上旬
- **第10回記念　子供から大人までのネパールの旅**
  3月25日～4月5日
- **乗鞍岳山麓紅葉狩りトレッキング**
  10月7日～9日（予定）

高山日赤病院中堅看護師研修プログラム

高山日赤病院はこの飛騨地域で一番大きな病院である。ケガや腰痛で私もよく世話になる病院である。この病院の中堅看護師の研修をやらせてもらうようになって14年になった。そして15年目となる来年の日程も決まった。めまぐるしく移り変わって行く時代の中で、よくもこれだけ長きに渡って続いてきたと思うと研修を担う者として嬉しくそしてありがたく思っている。

最初のころ、病院側から私に与えられた課題は「中堅看護師としてのリーダーシップの取り方」であった。研修会に参加してくる看護師さんたちはどの人の表情も厳しく、無言ながらも「あんた、私たちにこれ以上何をしろというのよ」といっているようだった。

夕食後の懇談の時、こんな場面に出くわした。少しは緊張がとれたのか職場と家庭を両立して行かなければならない大変さを各々話していた。その時一人の看護師さんがいった。「あんたたち職場と家までどれだけ離れている？私なんか歩いてたった3分よ。今日の勤務は○時まで、だから○分ごろまでには家に帰ってくると家人は計算している。あなたたちは家までの通勤時間、少しは自由になる時間あるじゃない。私はどこで気を抜くことができるというの。」他の参加者は黙ったままだった。その光景の中に看護師と主婦を両立させている参加者の現実の一端を垣間見たように思った。

職場と家庭で精一杯やっている看護師さんたち、そこへもってきて研修、研修、もうある種の研修アレルギーのような状態で「あんた、私たちにこれ以上何をしろというのよ」と無言のうちの抗議がわかるような気がした。今、彼らに必要なのは、からだの緊張をゆるめ、リラックスすること、そしてそのことが結果として同僚や患者とのコミュニケーションやリーダーシップ能力が高まることになると直感した。

私は病院の研修担当者と何もしない研修、強いていえばリラックス研修を提案した。それでは研修にならないという。いろいろのやり取りの末、私にまかせるということになった。それから私の10数年に渡る試行錯誤が始まった。いつも強いテンションをかけのばしっぱなしのゴムはやがて弾力性を失い、のびきってしまったゴムひもになり役に立たなくなってしまう。いつも緊張を強いられ、心もからだもかたくしている人も同じだと思う。大切なことはからだをゆるめること、心のマッサージである。あぶらむの里という空間は私にとっては心のマッサージを可能にする一つの道具である。それは自分の心とからだをゆるめ、それを通して自分をＯＫし他者をＯＫできるように、広い意味で自分が変わって行くこと、そのための道具である。

諸魂庵のあの広い板間に大の字になって寝ころび、音楽や朗読をからだ全体で聴く。たったそれだけでも参加者のからだに変化がうまれてくるのです。この研修に参加した看護師さんの感想文を通して、15年近く続いてきたあぶらむが提供するプログラムを想像していただければと思う。

あぶらむ研修を終えて

自分はどこに向かっているのだろう。私の目指す看護とはどんなものなのだろう。

「気持ちいい」「ありがとう」という２つの言葉に支えられて、今までがんばってきたのではなかったか？どうして毎日こんなに忙しいのだろう。器が小さいこんな自分なのだが、それでも精一杯背伸びもし、出来ない分もがんばってしまう。若い頃から一向に成長していない自分にご対面だ。そんなことを思いながら、疲れた頭と体に鞭打って、あぶらむ研修に向かった。

そこは別天地だった。喧噪から離れ、別の時間が流れていた。ゆっくり、ゆったり、穏やかに時が過ぎていく。大郷先生によってそのようにプログラムされているのだが、そんなことを感じさせない研修だった。痺れるような至福のときを味わいつつ、感受性が豊かな方ではないが、涙が出て仕方がなかった。

「これは、音楽のシャワーだ。」と思った。自然の中で肌に冷涼な風が渡る山の研修室の中、文字どおり大の字になって、目を瞑って聞いた。すばらしい音。心にダイレクトに伝わる音。そして体中に、それこそ皮膚と皮膚の隙間からしみわたるように伝わっていく音楽だ。歌っている意味はわからないが、歌の心が伝わってくるのだ。音楽を、真正面から、真上から降り注ぐように聞いたのは初めての経験だった。そして、せせらぎの音とともに、静かに聞こえてくる穏やかな心にしみる朗読。こんなことは久しくない経験だ。機械的な音は何も聞こえてこない。

先生の朗読は、脊損患者の話だった。大声で泣き叫び、手のつけられなくなった患者を黙って負ぶって、夜桜を見に連れ出してくれた看護者の温かい背中が、患者の心に変化をもたらしたのだ。自分の病棟の脊損患者が目に浮かぶ。どうしようもない苦しさが胸をつく。悲しい、やりきれないという患者の心の痛みにともに寄り添う私たちの姿がそこにある。

家族のプレート作成では、家族を思いながら作り楽しかった。玄関に飾っていい思い出になっている。美味しい手作り料理に舌鼓をうち、前日の不眠がたたり、宴会半ばにして寝てしまったことが悔やまれる。翌朝、気持ちよく目覚めたのだが、寝言で看護支援のことを言っていたらしい。寝てもさめても看護支援が頭から離れない。「リフレッシュしてない」と冗談を言い合い、普段あまり話すことのない自分の家族のことをお互い話した気軽さが、気持ちを近づけてくれたのだろうか、とても打ち解けた雰囲気の中で一段と楽しく過ごすことが出来た。ピザ作り、地図作り、あっという間に食事をして、最後の時間となった。普段、自分の思いをしみじみと人に伝えるということはないのだが、大勢の職員の中で、こうして知り合いになれたことは大変に幸運なことだと思った。こんな研修がもっとあったらいいのに、というのが本当の気持ちである。

私の周りには、専門看護師や認定看護師がいる。社会福祉士になりたくて、大学を目指す人もいる。もし私が若かったなら、やはり大学を目指したい。若かったあの頃、違う道を選んでいたら今の自分はいなかったかもしれない。いや、やはり同じ道を選んでいるのだろうか。

８月の看護協会ニュースに、「看護者の倫理綱領」が載っていた。「看護は、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会を対象とし、健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和を行い、生涯を通してその最後まで、その人らしく生を全うできるように援助を行うことを目的としている。」当たり前の看護を当たり前にこなすこと、その人らしく生を全うできるように援助することは、出来るようでなかなか難しい。「その人らしく」というところに、自分の価値判断が介入してしまうからだ。また、人生の半分を折り返した自分にとって、死を迎える人の看護に若い頃には感じなかったものがある。私のしたい看護とは、当たり前の看護「その人らしく、その人の生を援助していくこと」なのかもしれない。

今、私にはしなければならないことがある。今しか出来ないこともある。産み出さなければならない苦しみもある。だが、笑顔を忘れず、常に前向きに取り組む自分でありたい。

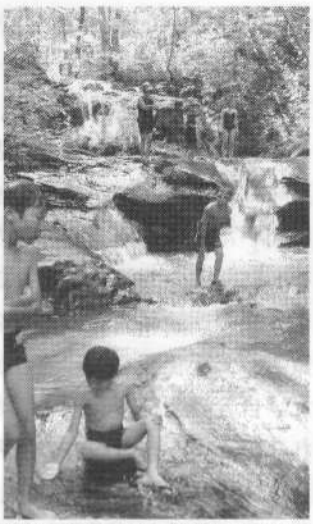
第１回あぶらむ夏期自然学校

（7月31日～8月6日）

この夏、念願だった子供対象のプログラム、「あぶらむ自然学校」を催すことができた。あぶらむの里のこの環境を十分に活用し、日ごろ学校や家庭では経験できないことを、子供たちに提供してみたかった。どこをむいても「危険なものから遠ざける」といった風潮の中、子供たちは一体どこから、何をどのように学んで行けばよいのだろうか。マッチ一つ擦ることができなくて何が危機管理、自分の身は自分で守るなのだろうか。

自然はぬいぐるみの熊でないことを教え「キケン」を察知しそれに対処して行く方法をここでの生活を通して伝えたかった。何よりも７日間親を離れて生活するだけでも十分な成果ががあったと思っている。

スナップ写真から子供たちの心の内、プログラム内容を想像して下さい。



あぶらむの裏庭、宇津江四十八滝の天然プール。

乗鞍岳（3026m）この満足顔。

宮川での川下り。子供はキケンから多くを学ぶもの。

車庫が食堂に早変り。新鮮な空気と共によく食べること食べること。

あぶらむの里に自生する植物での草木染め。美しく仕上がりました。

あぶらむの里にこんな大きなカブト虫がいるヨ。

2005年あぶらむ　この一年

1月・沖縄愛楽園にて創立者青木恵哉胸像除幕式出席。「選ばれた島」の原稿等資料を愛楽園ハンセン病資料館へ寄贈

2月・あぶらむ雪祭（11日～13日）
　・降雪量、寒さ平年並（最低気温－12℃）

3月・春一番の会
　・第９回子供から大人までのネパールの旅

4月・ＪＡ岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
　・第12回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）11ヶ国から17名の海外ランナー参加
　・ツリーハウス・ワークショップ・完成!!
　・南山大学人間関係学科ゼミ合宿

5月・川崎いのちの電話研修会
　・田植え（20日）
　・新しい犬が来る。犬種ラブラドールリトリバー（黒）「ぶぶ」と命名
　・津軽三味線二代目高橋竹山コンサート

6月・沖縄ナザレ修女会礼拝堂落成式出席　愛楽園訪問
　・ゲシュタルト・セラピー研修会

7月・岐阜　生と死を考える会　研修会
　・85年フィリピン・キャンプ20周年同窓会
　・アラスカ大自然の旅（参加者９名）
　・名古屋聖ルカ教会キャンプ
　・立教小学校「自然の中でおもいっきり」プログラム

8月・第１回あぶらむ自然学校（６泊７日参加者21名）
　・立教大学生フィリピン・キャンプ合宿
　・上智大学「生と死を考える」グループ研修会
　・韓国メソジスト教団ダンス・セラピー研修会（５泊６日　20名）

9月・高山日赤病院看護部研修会
　・徐牧師一家受けいれ協議のため訪韓
　・稲刈り（23日）
　・脱穀（30日、今年はヒエに負け不作）

10月・サウナ小屋完成
　・韓国メソジスト教団より徐（ソウ）牧師一年間研修のため来里

11月・逝去者記念式（１日諸魂庵）
　・「山と海との出会い」富山「寿司栄」　坂本吉弘さんを囲んで
　・韓国メソジスト神学大学李正培教授一行来里
　・沖縄聖マルコ保育園あぶらむ訪問団来里
　・味噌用大豆、白菜、大根等、冬用野菜収穫

12月・本格越冬準備開始
　・あぶらむ通信発送
　・あぶらむクリスマス会

※2005年　どうぞよいお年をお迎え下さい。

寄付者一覧（'04年12月7日～'05年11月26日）

東京聖テモテ教会奉仕会／星野一朗／祈りの家教会／江田宜子／松岡和夫／金子美弥子／萩尾重行／長尾文雄／伊藤文雄／菅原美穂子／野崎久子／山崎俊樹／小林賢三・佳子／河野正司・マリ子／鈴木康仁／谷昌二／相川喜久枝／阪本敦子／坂本吉弘／高畑謡子／熊谷一網／藤田宏之／三原一男・京子／友沢加代子／鈴木眞喜子／本田りん／森下祐子／村岡裕／俵里英子／山岸勇一郎・悦子／佃寿子／植木友里江／矢後和彦・正子／刑部賢／富永隆史・敦子／五十嵐正人・充子／長田英子／財満研三郎・由美子／炭竈英子／梶尾恵理子／中村芳枝／橋岡加都子／杉浦敏行／渡辺洋一／古沢伸雄／長谷川秀司／竹田純郎／蔦村的子／和田恵子・斉藤洋明／石田衣子／岸井孝司／外村民彦／萩尾信也・出穂／島田信弥／内間安仁／古沢昭夫／市川秀一／一柳百／市川聖マリヤ教会／太田精一／福岡女学院中学・高校宗教部／小泉恵子／安藤実・陽子／立教新座中学校ボランティアグループ／畑井正春／湊治郎／雨宮大朔／大山直子／常見幸代／木ノ内伸子／進藤武／江見淑子／神田キリスト教会／上田敏明／鵜川雅行／石神耕太郎／谷章子／片桐多恵子／河野とし子／矢部直美／日野忠一・静子／久田広子／愛知聖ルカ教会／熊沢洋子／高良孝誠／畑野榮一・寿子／武藤六治／前田晃伸・容子／平安女学院同窓会／大塚梅子／田尾兵二／東京セント・ポール・ライオンズクラブ／鈴木茂男

新規会員（'04年12月6日～'05年11月26日）

吉野康／大橋雅子／黒田則子／島文子／佐瀬京子／赤松道子／山本岳／西間木美恵子／石元裕美／八木克道／仙敷正俊／長縄年延・光子／箕輪イウリ／静谷英夫／山本智子／林光代／斉藤和子／日野静子／砂川博秋・美智子／川満一彦・すわ子／酒井忠喜／大塚梅子

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。